



教育の理想を追求した教育実践家

クルト・ハーン(1)

放送大学・教授 岩崎 久美子

功成り名を遂げた人物の人生を紐解くと、必然とも言える事実がいくつかある。どの人生にも、チャンス、不遇などのその人固有の経験があり、人との出会い、転機などの人生の軌跡がその人をそこに至るように導いていると感じさせられる。

二十世紀以降の実践家や理論家を取り上げるこの連載において、今回は二十世紀最も革新的な教育者と評されるクルト・ハーン(Kurt Hahn)を取り上げる。

ハーンの名前は、国際バカロレアの理念的モデルとして創設された学校であり、世界各国から高校生を選抜し寄宿舎生活をさせながら教育を行うユニテッド・ワールド・カレッジ(United World College、以下UWC)の最初の学校であるアトランティック・カレッジ(高校に相当)の設立に影響を与えた人物として、頻繁に登場する。

しかし、ハーンの名前を有名にしているのは、このUWCのみではない。アウトドアの短期プログラムであるアウトワード・バウンド(Outward Bound)スクール、青少年を対象に奉仕活動や野外活動などの体験の時間数に応じて賞を授与するデューク・オブ・エジ

ンバラ/インターナショナル・アワード・プログラム(The Duke of Edinburgh's Award (DofE))、また、一定の教育理念を共有する国際的私立学校連盟・ネットワークであるラウンド・スクエア(Round Square)スクールなどの組織や制度の設計・確立にハーンは大きな役割を果たした。

このような顕著な功績を残したにもかかわらず、ハーンは、あくまで教育実践者であり、本人自ら執筆した文献は少ない。残されているものは講演録しかなく、彼の考えを体現しているものは学校、組織、制度そのものではない。そのため、ハーンは、日本の教育界ではあまり注目されてこなかったように思われる。

本稿では、ハーンが設立した主な学校であるドイツのザーレム・スクール、スコットランドのゴードンストウン・スクール、そしてUWCの三つに焦点を当て、ハーンの生涯とともに時系列的に紹介する。ハーンは、第一次世界大戦、第二次世界大戦の二つの大きな戦争を体験し、それゆえに、これらの学校を設立することで、恒久平和を希求し、青少年教育に理想、夢、未来を託したのであろう。

ハーンは、教授の勧めで一九一〇年にオックスフォード大学に留学する。この四年にわたるオックスフォードでの生活、その後起こる戦争、そしてドイツ帝国末期のドイツの政策や政治家に関わったことが彼の人生に大きな影響を与える。

最初の学校ザーレム・スクールの創設

ハーンは、オックスフォード大学留学後、第一次世界大戦の最中にドイツに帰国する。頭蓋骨の手術を受けた既往歴により兵役を免除され、ベルリンにある外務省でイギリスの報道を分析する任務に就いた。その報告書の質の高さから、当時の有力な政治的指導者たちと接触し、政治的直感と根回しなどの指導者に働きかける才覚を身につけたとされる。同時に第一次世界大戦中のドイツの有力な指導者たちとインフォーマルに接する中で、彼らの姿に失望したことで、自分の信念に基づいて行動する人格や市民的勇氣を持てる人材育成を目指し、ハーンを青少年の教育に向かわせたのではないかと言われている。

一九一八年十月、バーデン公マックス(Prince Maximilian von Baden)が帝国首相に就任(在任期間一九一八年十月三日から一九一八年十一月九日)すると、ハーンは彼の個人秘書となる。しかし、首相就任直後にドイツ革命が起り、ドイツの帝政は崩壊、バーデン公マックスは引退、南ドイツのボーデン湖に近いザーレム(Salem)にある城に隠遁する。

ハーンは、バーデン公マックスの回顧録の執筆の仕事に従事しながら、マックスと共に「病んだドイツ国家を癒す」仕事を始める。その一つがハーンの実験であった学校設立であっ

た。マックスは、ハーンと共に学校設立に動き、一九一九年十二月学校建設のための八〇万マルクの基金を創設、一九二〇年四月二十一日にマックスの領地内に全寮制の寄宿学校ザーレム・スクールを開校、ハーンはこの学校の校長となった。

このハーンが設立したザーレム・スクールは、個人の尊重、地域社会への責任、そして民主的プロセスの重要性の尊重を柱とする全人教育を理念として掲げていた。経済的に恵まれない生徒に対する奨学金制度も整備され、志を高く持つ青少年を集め教育を提供した。

しかし、一九三三年一月三十日にヒトラーが政権を握ると、その一カ月後、ハーンは急速逮捕され投獄される。ヒトラーは、最初の反ユダヤ主義令として、ユダヤ人を公的職業から追放する決定をしたが、この時投獄された理由は、ハーンがユダヤ人であるという事実によるものではない。直接的理由は、一九三二年八月にナチ党員五人により農村であるポテンパ(Potempa (Beuthen))で共産党員が撲殺された殺人事件、そしてその実行犯五人に対するナチによる寛容で不当な優遇的対応、その後に続くナチの暴行の数々に対し、

ハーンが正義心から反抗的態度を貫いたことによる。実は、ナチスは、ハーンにドイツのナチス化のための教育に力を尽くしてほしいと依頼していたとされる。彼はナチスの誘いを断固拒絶したばかりでなく、ザーレム・スクールの全卒業生に対し手紙を送る。その内容は、「ナチスにつくのか、母校たるザーレムにつくのか、全卒業生はその態度を明らかにせよ」という選択を迫るもので、ハーンは学校を挙げて反ナチスを鮮明にしていた。

ドイツに生まれイギリスへ留学

クルト・ハーンは一八八六年、ドイツ・ベルリンの裕福なユダヤ人家庭に生まれた。

祖父は、雑貨店を営み、その後、その事業をタイル工場、ガス管工場などに拡大した事業家だった。父親は、この祖父の事業を継続したのだが、イギリスを旅行するたびに、イギリスの田舎が好きになり、ドイツ・ヴァン湖の近くに、広い芝生、バラ園、クリケット場、テニスコート、牧場、果樹園を備えた伝統的なイギリス田舎家風の夏の家を建てた。ハーンはその湖でボートを漕いだり、森や田園を散策したりする楽しい時間を過ごしたとされ、このような経験が彼と二人の弟のアウトドア・ライフを刺激したと言われている。一方、ハーンの母親は才能溢れるピアニストであり、多くの著名な学者、政治家、芸術家を自宅によく招待した。ハーンは学校設立の際に人脈を駆使して支援を獲得したとされているが、このような社交的な母親の氣質を受け継いで多くの人とつながることができたのかもしれない。

その後、ゲッティンゲン大学に進学した

イギリスへの追放

ハーンが投獄されると、さまざまな人々が彼の救出に動く。バーデン公マックスと縁戚関係になるイギリスのエディンバラ公とイギリス政府は、彼の釈放のためにドイツと交渉を重ねた。

イギリス政府が動いた背景には、当時の英国首相ジェームズ・ラムゼイ・マクドナルド(James Ramsay MacDonald)の私設秘書だったネヴィル・バトラー(Neville Butler)卿が首相を説得したことがある。バトラー卿は、オックスフォード大学の学部生だった頃、開戦と同時にドイツから出国できなくなった。その危機的状況にあつて、ハーンの仲介でハーンの家滞在することを条件に収容所から解放された。このような恩義を受けたバトラー卿が今度は反対にナチスによるハーンの勾留に対し、解放を実現させるために働きかけたのである。

これらの様々な働きかけにより、ハーンは、その後釈放された。同時にドイツから国外追放となり、一九三三年七月にイギリスに渡ることになる。

参考文献

Nick Vevers and Pete Allison, Kurt Hahn, Inspirational, Visionary, Outdoor and Experiential Educator, Sense Publishers, 2011.
David Sutcliffe, Kurt Hahn and the United World Colleges with other Founding Figures, UWC Adriatic, 2013.
UWC History & Founding Ideas (https://www.uwc.org/history) (二〇一三年六月一日検索)